

再生説の検討

脇長生

「再生説」の真偽

「人間は生まれかわる！」という再生説、これは仏教でよく説かれているものである。そして、そうした教えがあまりにも長年つづいたことからか、今日では一般の人々も口にするようになってきた。

もちろん、心霊研究の分野においても、一つの重要研究課題として取り扱われており、本会（「心霊科学研究会」）も創立以来、それを一つのテーマに位置づけて研究をつづけている。初代の浅野和三郎先生は、これを世界的視野に立って研究した結果を機関誌に発表し、また「再生問題是非」という小冊子としても刊行している。

もちろん、浅野先生は、世界神霊主義大会に出席された機会をとらえて、欧米の心霊研究の実状に接し、帰朝された翌年昭和5年6月に機関誌上で「創造的再生説につきて」と題して、「人間は再生するか」どうかについての結論とを発表されている。

その序文に、「私は再生説肯定論者であります、いわゆる再生説は、本来一般に信じられているような一本調子の機械的再生説ではなく、かなり複雑な手続きを踏む創造的再生説であります」として、総じて霊界との交通能力の活用ということに基づいていると述べられている。

われわれもその創造的再生説の科学性を認めていながらも、さらに追試をすることにより、やはりこの再生説こそが真実であるとの結論から、これを提唱しているわけである。

一例として、前世の様子を物語った事例がある。その真偽を確かめるため、マスコミも実際に調査に参加して、その経路を正確に検証した。まず、前世において、ヨーロッパで女性として生まれ、生涯を送っていたことを確認し、その地へ特派させたのであった。わが国でもその情報を入手して見守っていた人たちがおり、また本会の例会においても、この話題に関連し、創造的再生説の追試報告と重ね、本会の主張の正しさを立証していたのであった。（注：ブライディー・マーフィーの事例）

最近、ことに宗教に関心をよせている人々の間で、この再生説が問題となっているようである。聞くところによると、あるグループの指導者が、この再生を口にして、「人間は生まれかわる」として、仏教でいう「全部的再生」を強調しているという。その人はもちろん、仏教というより釈尊をあくまでも偉大な人物として尊敬している人のようである。それは人々の見方、考え方で、その是非はいうところにあらずであるが、この生

まれかわるといふことの意味は、人生観にきわめて大きな影響を与えるものであることを知らなければならない。すなわち、人間生きているものにとっての直接的な人生問題であり、それに加え、この再生問題の質問が多くなってきたのに鑑み、今回この話題をとりあげてみたわけである。

われわれの主張している「創造的再生説」は、全く仏教でいう「全部的再生」（注。個人がそのまま再生する）とは異なるものである。それは一つには彼らの強調している説の根拠は全く科学性のないものであるからであり、さらに、いわば単なる、仏教独特の善悪を説きあかすため（勸善懲惡）の「手段」として利用されているものだからである。

再生説の捉え方

さて、お互いに、人間というものを考えるときに、再生するのか、しないのか、どうであろうかと思う時もある。ここで、一般の人々は、現実の問題として、また、実際問題として、「そんなことはありえない」、あるいは「『死』という事実のあとは、何ものもない」などと、この再生説としての人間の生まれかわりを認めようとはしない傾向がある。それどころか認めるかどうかと言っていることすら、「迷信の類だ」、「何を言っているのか」と嘲笑の対象としているようである。

しかし、宗教に強い関心を持っている人、あるいはすでにある宗派の信仰をしている信者などはこの再生説を一応認める態度をとる。たとえば、世上でよく話題とされる例としてつぎのようなものがある。

ある人の足の裏（死者の）に墨を塗って、野辺の送りをすませたところ、驚いたことに、その人の近村の家で生まれた赤ん坊の足に、この塗られた場所でも同じ、まさしく生まれかわって来たとしか考えられない不思議な出来事があったという。

この話に似た生まれかわりが、かつての例として、やはり大阪にもあり、それが東京で死んだ人の生まれかわりであるというのであった。その当時大騒ぎといえる事件でもあり、一般の人から考えれば、あるいはこうした生まれかわりもあるのではなかろうかと思うであろう。こうしたことがまた、仏教信者を中心として再生を肯定する人たちを増加させたようでもある。

学問の世界でも、「再生」ということが大きな問題として取り上げられている。物質は「再生」するということもあり、そこにはいろいろな内面機構といえる法則すら見出されているものもある。

人間を「肉体、すなわち物質」と見る人。その人は生命も物質と考えている。生物学や生化学の研究に携わっている人たち、彼らの多くは、人間は物質である細胞でできていると考えている。その細胞は肉眼でこそ見えないが、適当な顕微鏡で視ると判る。たしかにそのとおりである。そして、それそのものに生命が宿っているとか、働いていると考えているようである。(言うまでもなく、細胞は顕微鏡下で認められ、その組成はタンパク質、その外の物質から成る。その物質は生命なのか？問題はただその外観によってのみ判断しようとしていることである。そうした考え方の学者を“唯物学者、物質万能学者”と私は呼んでいるが。)

このような見解から、学者にとっても、この再生説というのは、興味のある話題となっているのかも知れない。

しかし、それとは別に、仏教信者の間で理解されている再生については、根本的に、明確に区別させておく必要がある。それは、仏教といわず、信仰している人の数も多いことで、その勢いをもって社会に間違った説をまき散らされてはたまらない。また迷信者を多く作りたくないからである。それは私たちの理解では、この再生問題は単なる再生のみの問題ではなく、正しい意味の人間問題・人生問題などとして重要視すべき内容を蔵しているからである。

再生は人生問題

この問題は本来デリケートな問題である。前者、仏教徒の再生についての話は、“風説に基づく事実”とも言えるストーリーと言ってよいかも知れない。この意味は、この話の最後に言うべきことであるので、後回しにしよう。しかし、少なくとも心霊知識の持ち主といえる人たちは容易に理解されると思うが、一言付け加えると、この仏教徒たちの考えている再生は、霊魂の憑依と混同・同一視した誤った解釈であって、本来の再生とは異なるということになる。

とはいえ、一般論として、多くの心霊学徒が認めているように、通念的再生は認めているのである。しかし、仏教徒が信じているような“人間・生まれかわる”(全部的再生)ケースは人間には起こらないということである。

もちろん、このように説く場合にもっとも必要なこととして、人間は永遠の生命(霊魂不滅)をもった生きもので、一般の人たちが考えているような「死」はないというのである。すなわち、人間は霊魂で生き通している。これこそが真の人間観である。そしてこれが前提としてであり、それによって初めて正しい再生が吟味されるのである。

この真の人間観に立って人生をながめるとき、この再生説は、これほど人間にとって

重要かつ重大な問題はないということを提起することになる。単なる再生説ではない。ことに人生問題において、人間は死なないことの信念をもっておく必要を感じる。

霊魂で生きている実証

この問題について、どの学問よりも「正しい人間」を教えてくれるものは、心霊科学に基づいた近代霊魂学（スピリチュアリズム）である。その研究過程にもっとも必要な資料の一つとして、あえて言うまでもないと思うが、優秀な、あくまでも高級霊（霊界以上の世界に属する霊）からの啓示として放送された霊界通信によることである。

その意味で一例を挙げると、つぎに紹介するジュリアの通信（W. T. ステッドによって受信された自動書記。ジュリアは生前 Ames, Julia と言い、ステッドの友人であったが若くして他界し、霊界に移ってからステッドのコントロールとして活躍した）は、その優秀な内容については、すでに世界的に承認されているとおりであり、その正確さと相当の深味と教訓までも包蔵しているのである。その通信の一部、「死」についての感想を述べている一節を紹介してみよう。

「私は死後、幽界で目覚めた。何の苦痛もショックもなく、さながら熟睡からさめたようである。これがもっとも普通の状態（現象）である。ということは、全部の人がそうだとはいかぎらない。いろいろの場合があるようだ。

「しかし、大部分は苦痛のない目覚め、これが常態。私の幽界における第一印象といえば、安息であり、平和であり、休養である。不慮の死を遂げた人たちは、いつそんな境遇の大変化が自分を襲ったのかしららない。肉体の苦痛など、生前身につけていた衣服とおなじく、皆、どっかにかなぐり捨てている。万事、ただ一場の悪夢から覚めた感じである。

「生前の夢と違うのは、生前の夢は、覚めた場合、自分を見出す。それが思いもよらぬ別世界である。こういった感じをうけた。多くの人たちは自分の死んだことを信じようとはしない。むしろ『死』というものはない。肉体は亡びても彼のもっていた一切の能力は具えて生きている。肉体があった時と同じであって、人間が変わってしまった感じはどこにもない。そして、彼は依然として彼。彼女は依然として彼女。子どもは依然として子どもとして目覚め、老人は老人として目覚める。」

死んだと思うのは、むしろ第三者（一般の人々）の考えで、肉体は死体として葬送したということで、“何ものもなくなった”と考えてしまう。

しかし、それが病死であろうが、他殺的行為をうけた場合であろうが、肝心の死んだと思うべき本人は、実は死んだと思っていないのである、とジュリアは地上に放送して

いる。

死の前後についての心霊研究は、もはや一世紀を超えている。その間、いろいろの角度から研究は進んでいるが、そのすべては、科学的態度によつてのことである。しかも、実験結果に基づいており、「死の瞬間」の実態は写真にまで撮影されている。

なお、進んでそれらを総合し、また、前述のような霊界通信によるとしても、単に3人、5人という少数者ではなく、多数の有力なる証言を中心に調査し、整理の上、優秀霊媒を使って、追試・検討して、死後の世界とその居住者の生活に関する確実性を正そうとしているわけで、このような心霊科学者は、世界いずれの国にも数多く存在し、それぞれの研究業績を発表しているのである。ここに紹介するイギリスのアーサー・フィンドレイはそのような研究者の有力な一人である。彼の著書を読むと、死後の生活がもつとハッキリ叙述されている。

この外、死後の生活について述べている書物としては、もはや昔のものとなったといえようか、世界的科学者オリバー・ロッジの著書もよく知られている。これが日本でも大正年間に刊行され、それ以来世界的著名な学者によるものは邦訳されているので、わが国の読者諸氏の間には、また、世界的知識人はもはや死後も個性が存続（「靈魂不滅」とも言い換えられる）していることは認めてよいことを知っているはずだと思う。

しかし、何と言つても自然科学はこれを認めていないというのが現状である。いずれは、これを認めざるを得ない時代も遠くはなからうかと私は信じている。その現れの一つとして近頃、超能力をいうが、そうした方面から人間を考え直す機会があり、また、アメリカやロシアでの超心理学研究等、いずれは「人間、その未知なるもの（心霊、靈魂を含め）を認めるべきだ」と言つたアレキシス・カレルのような一歩前進した超能力の学者が必ず、世界のいずれの国からか現れることと信じているからである。

死後の世界とその居住者の生活

再生を考える時に、死後の生活をしている人々は、かつて地上時代にどんな生活を体験していたか、前述ジュリアの通信で、大体は理解されたかと思う。その他界人には、一人の例外もなく、他界での指導者がついてくれている。

これについてジュリアはつぎのように述べている。

「肉体を棄てた靈魂が幽界に入った当初は、往々途方にくれているものもある。ちょっと外国へでも行った感じである。幽界には、幽界の政庁があり、その政庁の役人は途方にくれている幽界人がいると、すぐに見つけてくれると同時に、その帰幽者にふさわしい（一定の孤独の期間はあるが、それが済むと）、一人の天使が近づいて言葉をかけて

くれる。」

この通信は、まだまだ続くのであるが、要するに、この天使がその幽界人の霊界における指導者になるのである。しかし、注意しなければならないことは、帰幽者のうち生時において死後の存続を信じていなかった人たちは、死後の生活について霊魂不滅（死後個性の存続）を認めようとはしない場合がほとんどである。したがって、反抗とか反感を抱き、天使のいかなる注意にも、指導にも応じない態度をとる人たちに対しては、そのまま自己の非を悟るまではうちすてておくというのである。とにかく霊界は自覚の世界で、それによって向上への道をたどる世界であることを、この通信でもジュリア霊はくどく述べている。

人間は、オギャーと生まれたときから、もはや、先天的な一生涯という「人生」に対して守護の霊魂（守護霊団）が働いてくれ、ついで死後、すなわち、地上に似通った次元の世界（幽界）では、高い世界へと向上の道を守りかつ指導神が働いてくれている組織となっている。しかし、これに反するとき、向下の道をたどることになる。たとえば、地上へ戻って来て憑依霊となり地縛霊となって、とり憑いた人々を不幸へと歩ませることになる。それだけに指導神は、本人を善導しようとして厳しい態度をとるのである。その所以は、指導神はあくまでも、霊魂の本質は向上性にあることを自覚させようとする真意からであり、これが人間すべてに関する原理でもあるからということにある。

この向上性の発揮こそは、実は自我完成への道であり、人生の意義はまさにここに存在するのである。それだけに、絶対であり、厳然たるものといえる。したがって、その間には、何らの例外もなく、譲歩もないのである。この厳しさが、ここで取り上げている再生と関連しているのである。

真の再生

地上における物質生活は、人間にとって向上性発揮の出発点である。「守護の霊魂へ進むための修行の場である」といわれる所以もここにあることを知るべきである。

霊魂の働きこそ肉体・人間の働きであることが、原点をなしていることはいうまでもない。

それだけに、人間が地上から霊魂世界へと移って来たとはいえ、霊魂の向上に関するかぎり、そのすべては、地上における向上心と、あるいは人間完成に関しては、向上性の内容が要素をなしているのである。

具体的に言えば、幽界においてもそうであるが、霊界においての向上性の不完全、何らかその点に欠けたものを有している場合、その如何によっては地上生活をやりなおし、

地上生活における欠けたるものを補うということまでも必要とする場合がある。これが再び地上生活を繰り返さねばならない原因であり、これが再生と関わるのである。

しかし今日までの科学的（心霊科学）態度による原理と実際からみて全部的再生の意味は成り立たず、霊魂の本質からみても分霊による再生こそ正しく、また霊魂の本質の一つである分霊を派出させることこそ当然といえる。いうまでもなく、全部的再生という、オギヤーという赤ん坊から、もう一度人生のやり直しをさせることはないのである。

この分霊的再生を、浅野和三郎先生は「創造的再生」として学問の上から命名し、これを提唱した。その原理と実際を実例をもって、昭和6年に発表されている。その内容については当時の報告論文の全編を通覧されたい。

なお、この生まれかわりにつき、もっとも強力な裏付けの一つとなるのは、霊界居住者内から地上に戻った（生まれかわり）霊があったか、今も存在するのか、ということである。このことについて、もちろん浅野先生の研究による実験的な例証によると、調査の対象は300人の霊であるが、すべて地上に戻った霊は一体もない。

この調査について、私もかつて審神者時代にこういったことも考慮にいれながら、本吉・小林霊媒を介して招霊実験をした。その数は200体は遥かに超えていたことと思う。他日、その結果をまとめて報告する予定であるが、その成績はすべて招霊可能な事例であって地上に帰って来た例は一例もなかったことを明言しておきたい。